



離村年少労働者の非行行為の

契機に関する調査

その二——非行少年群と一般少年群との比較——

前田 栄

一番ヶ瀬 康子

田宮 良子

吉沢 英子

平松 美代子

第一集に於て対照群としての一般少年の生活について述べたが、此度非行少年群の調査結果がまとまつたので、対照群との比較において検討してみた。

一、調査について

I 対象

非行少年群（以下D群と称す） 七八名

一般少年群（以下C群と称す） 五〇名

D群は東京家庭裁判所少年部の御厚意により同所のケースを頂き、その他多摩少年院、久里浜特別少年院在院者より該当ケースを調査した。

C群については、第一集に記載した通りである。

2 方法

質問紙による面接調査

3 調査期間

一九五三年十月から五四年九月まで

二、調査結果

今回、%の計算に当り無回答のものを除いたので、C群の数字も第一集と、やや変つた事をお断りする。

I 基礎条件

(1) 年齢別

第一表の如く、D群の方が平均で六ヵ月年長である。

表1 年齢別

項目	%	
	C	D
15才	6	0
16	12	0
17	9	12
18	29	29
19才以上	44	59
平均年齢	17才 11ヵ月	18才 6ヵ月

表2 出身地

項目	%	
	C	D
隣接地	13	6
近接地	8	31
遠隔地	79	63

(2) 出身地は遠隔地が両群とも最も多い。此の場合、隣接地とは東京都に接している県、近接地は関東、甲、信、静をさし、遠隔地はそれ以外の県をさす。

(3) 父母別

第三表にみる如く、実父母を有する者はC群に比し、D群には少ない。

才三表 父母別

項目	%	
	C	D
父 母	72	44
父 継 母	3	2
父 実 母	0	2
父 継 父	9	18
父 実 父	15	26
母 継 母	1	8

1 (4) 親の職業別

第四表の如く両群共約半数は農業であるが、その他も大工、工

才四表 親の職業別

項目	%	
	C	D
農業	54	46
林業	3	0
漁業	5	6
建設業	15	4
金融業	10	6
通信業	1	4
業務	0	4
その他	8	4
職なし	1	4
なし	1	4
なし	1	10
なし	1	8

群におおつては五四%、D群では三五%と、C群の比率が高い。

(5) 家族数、同胞数

才五表 家族数

項目	%	
	C	D
2人	4	2
3~5人	24	35
6~8	53	49
9~11	15	10
12人以上	4	2
わからない	0	2
平均	6.7人	6.2人

才六表 同胞数

項目	%	
	C	D
1人つ子	6	2
2~3人	18	29
4~5	40	43
6~7	27	26
8~9	6	0
10人以上	3	0
平均	4.8人	4.3人

(6) 第五表、第六表にみる如く、両群に大差はない。本人同胞間に於ける位置

才七表 本人の位置

項目	%	
	C	D
長男	15	31
次男	34	31
三男以下	32	16
末子	13	20
一人つ子	6	2

第七表にみる如く、長男がD群に多く表われた。

1 (7) 教育歴

両群共半数が中学卒であるが、C群においてはそれ以下が1%、以上が四九%となつてゐるのに比して、D群は中学中退

才八表 教育歴

項目	%	
	C	D
小学校中退	0	6
小学校卒業	0	6
中学校中退	1	17
中学校卒業	50	52
高校在学中	8	2
高校中退	5	13
高校卒業	31	2
大学在学	5	2

以下が二九%、以上が十九%と、その関係が逆である。
2 学校の中退者とみる
とC群では中学、高校併せて六%なの

(8) し、D群では小学校、中学、高校併せて三六%に達する。
非行行為別

才九表 非行行為別

項目	% D	
刑法犯 窃盗	47	
" 強盗	3	
" 暴行	12	
" 詐欺、横領	14	
" 其の他	7	
虞犯	5	
その他	12	

第九表の如く窃盗が最も多

(9) 非行回数

第十表の如く二回以上の者が約半数をしめる。

才十表 非行回数

項目	% D	
1回	38	
2~5回	46	
6~10回	8	
11回以上	5	
わからない	3	

才十一表 上京から最初の非行までの年数

項目	% D	
上京前	24	
半年未満	11	
半年~1年	16	
1~2年	8	
2~3年	24	
3年以上	16	

(10) 上京から最初の非行までの年数
第十一表にみる如くである。

以上基礎条件についての考察のうち、特に問題点(即ち両群に著しい差の表われた)点は、実父母の有無と、教育程度、特に中途退学の問題である。

(1) II 離村時の状況
離村の理由

1 離村の理由を単に都会へひきつけられて出たという消極的な

才十二表 離村の理由

	項目	% C	
積極的理由	進学目的	30	5
	独立したい	18	13
	成功をめざして	7	12
	仕事を覚えるため	1	8
	計	56	38
消極的理由	家村の嫌悪	3	7
	村に仕事がない	19	20
	知人親戚を頼つて	3	5
	都会への憧れ	19	16
	計	44	62

ものと、自ら進んで何らかの意図をもつて出たものと分けて考察すると、D群はC群に比して、積極的なものが少ない。殊に差のあるものは進学目的である。

2 村に仕事がないというのが両群共通の現象で、実際はこの数字以上(M・A・のため)で実人員に対しては、D群三四%、C群二六%を占める。

(2) 東京を選んだ理由

特に東京を選んだのは両群共、知人、親戚の縁故によるものが多い。両群の間に進学目的を除いて大差はない。

(3) 上京前に就職先宿所決定の有無

(3) 家庭における嫌な経験

才十四表 親の承諾の有無

項	目	%	
		C	D
承諾	本人の将来を考えて	36	21
	村に仕事がないため	11	12
	進学の	9	2
	其他の	26	27
不承諾	配不足	0	6
	心不	1	4
	人手な	3	0
	化人の	3	0
	良のし	6	14
無関心	無	8	2
	相談せず	0	12

才十三表 東京を選んだ理由

項	目	%	
		C	D
知人、親戚がいたから	仕事があつたから	32	29
	将来性を考えた	22	20
	憧れの目的	21	14
	進学の	12	17
其他	学	12	3
	目的	1	16
	其他	0	1

III 家庭とのつながり
決定していただくものD群七十二%、C群七十五%で殆ど差はない。

(1) 離村に対する親の承諾の有無
十四表の如く、C群は承諾八二%、不承諾十%に対し、D群は承諾六二%、不承諾二四%、他に「相談せず」が出た事が目立つ。
(2) 誰と上京したか
第十五表の如く単独のものがD群に多く、親類、家族が合わせてD群十八%、C群三二%とD群が少ない。

- (1) 上京後の職種
I D、C群共、工業を離村時に希望するものが、ほぼ三分の一を占めて居る。
2 しかし、上京直後の工業就職者は圧倒的にC群が多い。
3 商業を離村時に希望しないものが、D群では、半数も上京直
- (4) 上京後の家庭とのつながり
1 家の事を考えたかという問に対してD群は始終考えたもの三二%、時々思い出す程度の者六三%、その他二%で、C群は始終考えた者二九%、時々思い出した者六九%、その他四二%で殆ど差はない。尙両群共、もつとも多く母の事を考えている。
2 家から帰郷を促された経験はD群二六%、C群十七%であった。D群には非行によるものがみられる。
以上事実から、離村は村に仕事がない事を前提条件として、非行少年はどちらかといえば消極的態度で、一般少年は積極的な目的をもつてなされる。それに対する親の態度は一般少年の方はより協力的であるのに比し、非行少年の方は非協力的とみられる。
- IV 職 場

才十五表 誰と上京したか

項	目	%	
		C	D
募集	人	4	2
	人	6	14
	人	15	8
	人	1	0
	生	8	4
	類	24	14
	族	36	53
	独	4	4
	他	1	0
	其他	1	0

嫌な経験を有して居る者はD群三六%、C群二九%であり、その内容は感情問題がD群二四%、C群十四%である。これはD群に欠損家庭の多い事と関係がある。

オ十七表 職業選択の理由

項目	%	
	C	D
興味	29	33
自分に合う	19	7
夜学に行ける	11	0
将来性がある	10	4
人のすすめ	6	0
労働条件がいい	2	0
理由なし	13	33
その他	8	16
わからない	2	5

(2)

- 職業選択の理由
- 1 「自分にあう」「将来性がある」と云う理由は、C群が二倍以上多い。
 - 2 「夜学に行けるから」「人のすすめ」の理由による者は、

オ十六表 離村時の希望と上京後の職種

項目	C %		D %	
	出村時の希望	上京直後の職種	出村時の希望	上京直後の職種
工業	40	68	31	39
商業	15	13	8	16
サービス業	3	4	29	10
建設業	1	1	6	14
事務関係	12	13	4	6
その他	6	0	0	14
希望なし	22	0	19	0
わからない	1	0	2	0

村時の希望がC群に多いにもかかわらず、実際の就職の際にはD群が、圧倒的に多い。しかし、此の場合、C群が離村時に希望していた職種が、「公務員、学生」等であるのに反し、D群が上京後に就職したものは「運転助手、客呼び、切符の聞売り」等々である事が異なる。

- 6 事務関係は、希望及び就職者共にC群に多い。
 - 7 その他の職種は、離村時の希望がC群に多いにもかかわらず、実際の就職の際にはD群が、圧倒的に多い。
 - 5 建設業も、希望及び上京直後の就職者がD群に圧倒的に多い。
 - 4 サービス業の希望及び、上京直後の就職者は、D群に多い。
- 後に商業へ就職して居る。

オ十九表 全従業員数

項目	%	
	C	D
10名以下	23	55
20 "	9	13
30 "	13	6
50 "	8	8
100 "	15	8
200 "	3	4
300 "	17	2
300名以上	11	1
わからない	0	2

(4)

- 3 企業が、C群には、圧倒的に多い。大体に於て、離村年少労働者は、中、小企業に就職し、その
- 職業場の紹介者
- 1 C群はD群に比し約二倍、親戚、職安、学校の紹介が多い。
 - 2 D群はC群に比し、非常に、友人の紹介が多い。
- 企業規模
- 1 小規模、特に十人以下が二倍以上、D群に多い。
 - 2 一〇〇名以上、特に二〇〇〜三〇〇名及び、三〇〇名以上

オ十八表 紹介者

項目	%	
	C	D
人感	32	28
親戚	23	12
職業安定所	16	8
学校	14	5
家族	12	8
友人	3	19
告他	0	9
その他	0	6
わからない	0	5

(3)

- 3 理由なしが、D群の方に、非常に多い。
- 4 D群は、大体に於て、「興味」及び「理由もなく」漠然と選ぶのに対し、C群は、一応はつきりした理由を持つて居る者が多い。

オ二十一表 待遇

項目	%	
	C	D
住込み 食事・衣服付	19	17
	14	54
	12	1
(住込みでない) (寮・社宅等)	34	1
	2	2
	2	2
通勤(徒歩より) わからない	16	19
	0	4

1 D群が、住込みが非常に多く、C群は、寮・社宅生活者が多い。通勤は、同程度である。

オ二十表 賃金

項目	%	
	C	D
1,000円以下	6	10
2,000 "	10	18
3,000 "	10	16
4,000 "	12	7
5,000 "	18	9
6,000 "	32	13
7,000 "	5	3
8,000 "	6	24
わからない	1	1

B その他の待遇

A 賃金
中、D群が特に小企業に多いと考えられる。

オ二十二表 労働時間

項目	%	
	C	D
8時間以下	7	10
8時間	14	10
9時間以下	46	19
10 "	4	15
10時間以上	28	45
わからない	1	1

1 D群に十時間以上が非常に多く、C群は、九時間以下が多い。

C 労働時間

(5) 労働条件
I D群が、C群に比し、三〇〇〇円以下が多い。
2 八〇〇〇円以下がD群に多いのは、主に土建業によるものが多し。

オ二十五表

職場への意識
(その理由)

項目	%	
	C	D
仕事に興味あり	20	21
将来性あり	17	13
対人関係に満足	9	27
技術を身につけたい	17	11
その他	20	21
理由なし	17	7
労働条件に不満	28	15
職場環境に不満	11	15
職種に不適当(精神的)	33	31
職種に不適当(身体的)	4	7
対人関係(上司)	9	9
対人関係(仲間)	7	8
その他	4	15
理由なし	4	1

B その理由

オ二十四表

職場への意識
(永く留まりたいと思つたか)

項目	%	
	C	D
思つた	41	42
思わない	51	52
わからない	8	6

A (6)

職場への意識
職場へ永く留まっていたらと思つたかどうか。
I 「職場」に対する両者の主観的な意識には、殆ど差がない。

オ二十三表 休憩

項目	%	
	C	D
なし	15	38
1時間以内	5	8
1時間	68	33
1時間以上	7	9
2 "	1	5
わからない	3	7

D 休憩

I D群には「なし」が、C群の二倍以上ある。
相対的に見てD群の労働条件はC群に比し著しく劣悪であると云えよう。

オ二十七表 転職の理由

項目	%	
	C	D
家庭の事情	0	0
精神的に不適當	31	20
肉体的に不適當	6	12
労働条件	38	12
職場環境に不満	19	1
対人関係	0	15
雇用主の理由	0	11
本人側非行	0	19
その他	0	2
わからない	6	9

2 「自己の理由」によるものでは、C群が「労働条件」「精神的に
三分の一が雇用主側の理由（倒産、企業閉鎖等）である。
余儀なくせしめられたもので、その三分の二が非行、

1 C群の理由は「自己の理由」のみであるが、D群の四分の一は、余儀なくせしめられたもので、その三分の二が非行、

オ二十六表 転職回数 (7)

項目	%	
	C	D
なし	57	19
1回	36	25
2回	7	23
3回	0	8
4回	0	15
5回	0	4
6回	0	2
7回	0	0
8回以上	0	0
わからない	0	2

B. 理由
者がC群には無さのに対し、D群には三〇%ある。

1 D群には、転職をする者が、二倍近く多し。
2 三回以上の

A 回数
1 理由に於て「永く留まりたい」と思つた場合には、D群がC群より「対人関係の満足」による者が多い。
2 「留まりたい」と思わなかつた場合、「労働条件に不満」というのが、比較的少ない。

オ二十八表 娯楽M.A. (1)

項目	%	
	C	D
映画	74	92
読書	27	67
スポーツ	62	56
飲食	12	54
遊戯	4	42
人と雑談	20	21
競馬・競輪	0	6
遊戯その他	1	6
その他	1	6

V 都会に於ける余暇生活
娯楽
1 C群にみられたと同じくD群に於いても映画観覧が圧倒的多数を示している。
2 しかし、映画観覧が多い現象の裏には、多くの意味を含み観覧中に知り合つた友人との関係から犯罪を犯し、或は女との関係をもつたりしている。
3 遊戯（パチンコ）飲食、競馬・競輪、女遊びの順にC群との明確な差がD群にみられている。これは、離村時の状況、C群にみられなかつた土建業に従事し過酷な労働を強いられ、そのつくないの意味の刺激を求める傾向としてみることも出来る。
4 転職の理由は、前記の「職場への意識」と関連して考え、更に意味があると思われる。即ち、D群は、主観的にはC群と同じ位、職場に満足及び不満を感じて居たにもかかわらず、転職が、前記の様な諸理由に基づき多いのである。

4 更に読書はC群の二・四倍である。その内容は、両群共に映画

(2) 交友、知人関係

画雑誌が圧倒的多数であるが、D群にエロ本、ワイセツ本が多いが目立つ。これに関連し、少年院調査表に依れば、十六、七才で性関係の経験をするものが多い。
 5 転住回数もD群は五、六回で、歓楽街がその三分の二を占めている。

表三十 友人の有無

項目	%	
	C	D
友人なし	8	31
一人	13	11
二人	19	26
三人	15	9
四人	15	9
五人以上	29	13

1 友人数平均C群の五・三人に対し、D群では二・七人と二分の一の割合を示している。

2 相互に親身になつて話し合える友人は、D群にみられない。

3 D群に「友人なし」が三一%もあらわれていることは、前述の娯楽の箇所で見られる飲食、遊戯等一人で余暇を費しているものと一致しているとみられよう。

4 D群の場合は、犯罪の時の一時的結合とみられ、更に対人関係のまずさを物語っている。上京後、相談出来る人に対して両群共に親戚を頼るものが多いが、その内容は次の第三十一表の示す通りである。

5 D群に於ける「相談する者なし」三二%は、離村時の状況と深い関連をもつ。C群に於ては上京の際に就職先が決定し、上京後相談したことなしが四七%となつてゐることは、安定した生活を送つてゐるとみることが出来る。

6 一方転職の際にD群で「相談してゐる」二六%は、少年に

表三十一 上京後相談したか否か

項目	%	
	C	D
相談したことなし	47	16
経済的	5	4
病的	1	2
転職の時	9	26
勉強の時	4	0
理由なし	4	2
その他	15	18
相談するものなし	15	32

は、何らかの決定を必要とする時、年輩の大人の判断を借りることを求めているとも言えるだろう。

(3) 都会生活に対する態度

表三十二 東京に永く留まつていたい

項目	%	
	C	D
仕事をせよ	19	33
進学せよ	10	2
都会生活の他	26	27
理由なし	15	6
都会生活の他	14	13
都会生活の他	3	8
精神的不適	3	6
その他	4	4
理由なし	4	0
不明	1	

1 D群に於て「仕事がおぼえられない」三三%の意味するものは犯行との関連に於て追究されよう。

2 一仕事につき「きやすけい」がD群ではC群の二倍強となつてゐる。小規模な商店、小僧、建設業の土工になるものが多いためである。

3 東京での刺戟の多い生活に適応しがたく、農村地方に戻りたいと希望するものもD群にあらわれている。

才三十三表

東京での生活はよかつたか

項 目	%		
	C	D	
よかつた	生活環境がよい	38	38
	仕事につきやすい	5	13
	進学しやすい	1	0
	その他	20	11
どちらともいえない		12	13
よくなかつた	精神的不適應	11	15
	生活苦	5	6
	職場生活に不満	3	2
	その他	4	2

してD群では「親族の世話」が少なり。

4 D群では、東京での生活で、殆どの者七〇%が金銭に困つた経験をもつてゐる。

5 その補給には、C群に比

才三十五表 将来は？

項 目	%		
	C	D	
をる理る漠す的 他	理想にいく	20	4
	理想な世	56	52
	理想然厭	22	41
	その他	0	2
高も現理想然厭	2	0	

方を希望としてゐるものが最高の理想であることは、C群に比して低いと云える。これは教育程度との関連に於いてどうかかわれる事実である。

ま と め

結果の分析のうちから重要点を再びあげる。(非行少年群を中心として)

- 1 欠損家庭が多い。
- 2 学歴が低い、中途退学が多い。
- 3 離職は不安定、小規模である。
- 4 労働条件が甚しく劣悪である。
- 5 転職が非常に多い。これは客観的条件と、本人のバースナリティの両面から考察しなければならない点である。
- 6 友人が少なく、所謂悪い遊びがみられる。

才三十四表 生活費不足補給法

項 目	%	
	C	D
親族の世話	50	28
我慢した借金	15	11
前借	11	14
アルバイト	8	34
その他	8	0
その他	8	13

将来に対する理想

1 「理想なく漠然と過ぐす」ものがD群ではC群の二倍以上を示してゐる。

2 更にこれを職業別にみると、D群に運転手、機械関係を希望してゐるものがC群の五倍もあらわれてゐる。

3 「現在の生活の中に理想を求めてゐる」の中に、現職の長、親

6 「前借」によるものがD群には、C群の四倍強になつてゐる。

7 失業中の生活費については明確な結果はみられなかつたが、D群に於ては「非行」をしたものが約三分の二となつてゐる。